HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『宗教と社会貢献』の研究動向の概要
Author(s)	寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献, 5(2), 43-57
Issue Date	2015-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59911
Rights	『宗教と社会貢献』 (ISSN:2185-6869) は、創刊号より最新号まで大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive)にて全文公開いたします。
Rights(URL)	http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/index.html
Type	journal article
File Information	rsc0502-04terazawa.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	『宗教と社会貢献』の研究動向の概要
Author(s)	寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献. 5(2) P.43-P.57
Issue Date	2015-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/53827
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/

Osaka University

研究ノート

『宗教と社会貢献』の研究動向の概要

寺沢重法*

The Trend of “Religion and Social Contribution”

TERAZAWA Shigenori

1. 問題の所在

本稿の課題は「宗教と社会貢献」研究会における研究成果の概要と特徴を整理し今後の研究の方向性を探ることにある。具体的には、これまでどのような研究が蓄積されてきたのか、まだ十分に行われていないテーマは何か、そしてそれらを踏まえて今後どのような研究の方向性が可能かについて、研究会刊行の電子ジャーナル『宗教と社会貢献』を用いて検討する。

『宗教と社会貢献』は 2011 年 4 月から年 2 号刊行されており、2015 年 4 月時点で第 5 巻第 1 号が刊行されている。多くの学会誌が年 1 回ペースの発刊であることを考えると、『宗教と社会貢献』は約 10 年分の学会誌を発刊してきたことになる。10 年を一区切りとしてこれまでの学会誌の研究動向を振り返ることがしばしば行われており［春山 2009］、本稿もそうした形で振り返ってみたい。

筆者の現在の主たる研究領域は、台湾と日本における宗教と精神的健康、および台湾における社会意識形成要因としての階層とエスニシティーに関する量的研究である。そのため本レビューは筆者のこうした関心をある程度反映したものになっている。

2. 方法

本稿の分析対象は、『宗教と社会貢献』の第 1 巻第 1 号から第 5 巻第 1 号に掲載された、論文・研究ノート・報告・エッセー全てである。報告の多くはシンポジウムの記録や活動事例の紹介である。研究会では活動の現場とのつながりも重視されてきたため、報告も含めることにした。またエッ

* 北海道大学大学院文学研究科・助教・shterazawa@let.hokudai.ac.jp

セーを含めたのは、理論的議論とかかわる論考が含まれているためである。一方で、書評と博士論文の概要は除外している。以上の基準で抽出した結果、計 35 篇が得られた。本稿末の参考文献の中の、筆者名の後に「※」を付した文献がこの 35 篇に該当する。

なお研究会では年に 2〜3 回の研究会が開催され、様々な研究報告が行われている。これらの報告をサンプルに含めることで、研究動向がより網羅的に把握することも可能である。だが、研究報告をもとにした論考の多くがジャーナルに掲載されている。重複が多くなるため、研究会報告は対象から除き、必要に応じて参照する。

これらの論考をレビューするに際しては、(1) 研究の型と (2) 研究の内容に分けて整理する。前者は、①研究スタイル（理論研究、実証研究など）、②分析方法（量的研究、質的研究など）からなり、後者は、③社会貢献領域（福祉、災害など）、④対象地域（日本、台湾など）、⑤エリア（東北地域や沖縄など特定の地域に焦点があてられているか、など）、⑥宗教（対象となる宗教）からなる。以上の点について各論考をコーディングし、その分布を検討する。

3. 分析結果

まず、研究の型のなかの研究のスタイルを確認する。調査票調査やフィールドワークなどの知見を重視する実証研究、宗教と社会貢献に関する理論的検討を行う理論研究、そして研究動向の紹介に重きをおいたレビュー・動向研究の 3 つに分類した（図 1）。

多くが実証研究であり、理論研究［稲場 2011；櫻井 2011；矢野 2011；濱田 2013］やレビュー・動向研究［寺沢 2012］は多くない。

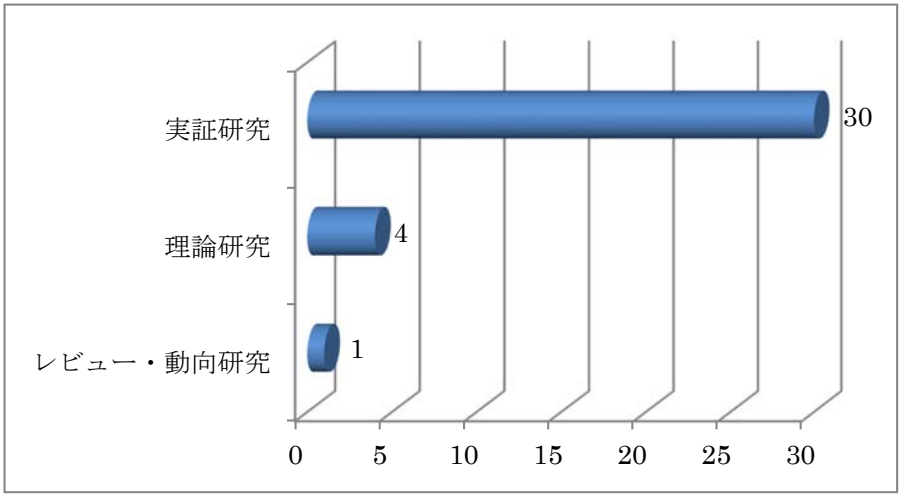

図 1　スタイル（N=35）

次に実証研究のなかで、どのような分析方法が採択されているかを確認すると図 2 のようになる。

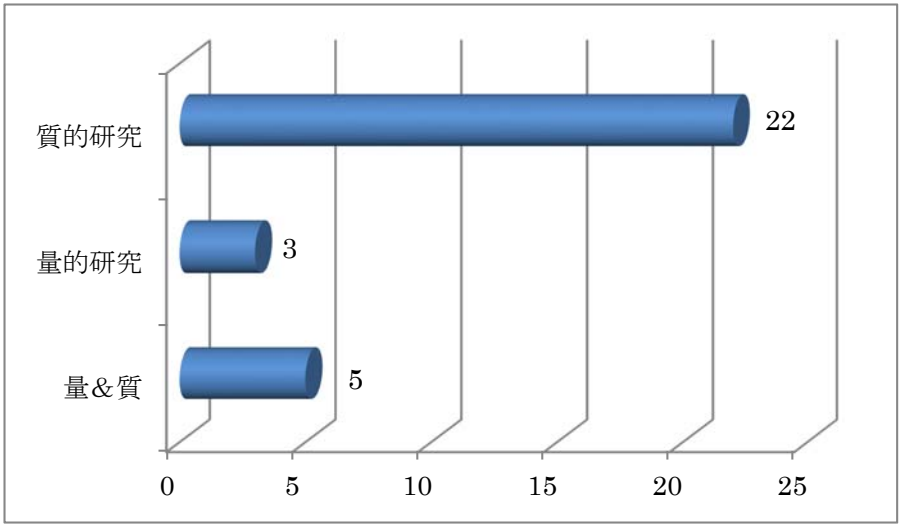

図 2　分析方法（実証研究のみ N=30）

多くが質的研究あり、量的研究は必ずしも多くはない。前者にはフィールドワークやインタビュー調査などの現場や人を対象としたものから、宗教者の言説や社会制度など幅広い手法が用いられている［濱田 2011、2014；

金子 2011、2013；葛西 2011、2012；宮本 2011；高尾 2011；渡辺 2011；山口 2011；川田 2012；長澤 2012；沖永 2012；白波瀬 2012；辻村 2012；阿久津 2013；嶺崎 2013；岡光 2013；高橋 2014；加茂 2015；伍・寺沢 2015；櫻井 2015］。量的手法をのみを用いた研究はすべて調査票調査である［稲場 2015；金谷 2013；寺沢・横山 2014］。量的方法と質的方法を併用した研究も行われている。これには調査票調査や統計資料の計量分析と自由記述の質的分析の双方を組み合わせた研究［寺沢 2011；大原・他 2012］、新聞記事の内容分析［冬月 2012］、地理情報空間作成を目指す「宗教者災害救援マップ」が含まれる［稲場・黒崎 2011；黒崎・稲場 2013］。

以上、研究のスタイルについてまとめると、これまでになされた研究の多くは、質的調査を中心とした実証研究が中心であることがわかる。計量的手法と組み合わせた量的研究も行われている。一方、理論研究や動向研究は少ない傾向にある。

次に、研究の具体的な内容を鳥瞰する。まず社会貢献領域については、稲場［2009］で提起されている分類を採択する。すなわち、緊急時災害救援活動（以下、「災害」）、発展途上国支援活動（以下、「途上国」）、人権・多文化共生・平和運動・宗教間対話（以下、「平和多文化」）、環境への取り組み（以下、「環境」）、地域での奉仕活動（以下、「地域」）、医療・福祉活動（以下、「医療福祉」）、教育・文化振興・人材育成（以下、「教育文化」）、宗教的儀礼・行為・救済（以下、「宗教」）である。

このうち「宗教」については、社会貢献に含まれるか否かの判断が難しく、またすべての論考がこの分類に含まれることになりうるため、本稿ではこのカテゴリーを外した。一方、稲場［2009］に含まれていないカテゴリーとして、ネットワーク・地縁（以下、ネットワーク）、社会貢献認識（以下、認識）を新たに追加した。前者は宗教施設などをベースとした地縁やネットワークを論じたものであり、後者は宗教者が社会貢献というものをどう認識しているかといった認識や評価を扱ったものである。

なお単一の活動に焦点を当てるのではなく、複数の活動に焦点を当てている場合も少なくない（たとえば、ある教団の社会貢献を論じる一環として、その団体の福祉活動も災害救援活動も論じられている場合）。あるいは特定の領域の社会貢献ではなく社会貢献全般を論じている場合もある。これらについては「全般」というコードを割り当てた。また、ある社会貢献

活動が厳密に分類できない場合もある。たとえば、ある特定の地域における災害救援活動の事例を取り上げた論考の場合、「災害」にも「地域」にも分類可能である。この場合、複数のコードを割り当てることも可能であるが、論考で焦点が当てられている活動を敢えて 1 つだけコーディングすることで、傾向をより見えやすくすることにした。領域の傾向をまとめたのが図 3 である。

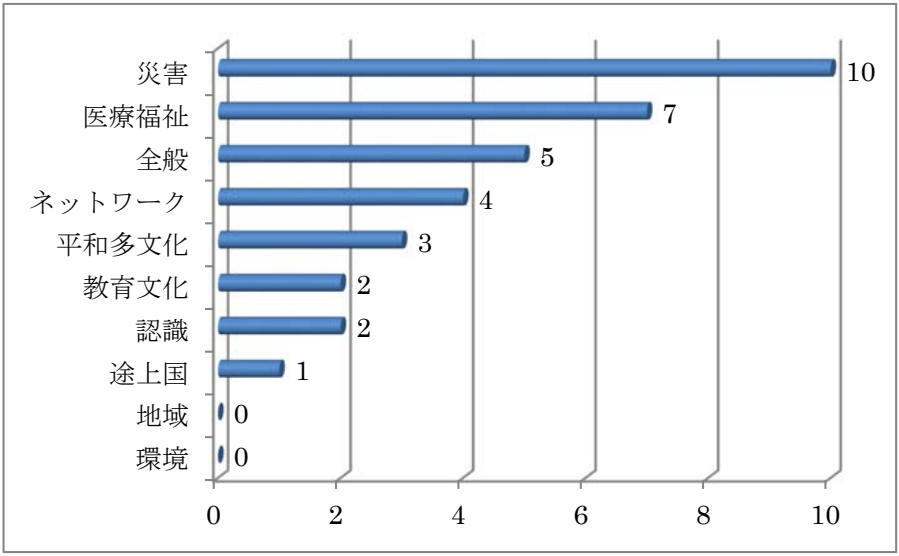

図 3　領域（理論研究と実証研究のみ N=34）

ここからうかがえるのは、「災害」［濱田 2011；稲場・黒崎 2011；金子 2011；葛西 2012；川田 2012；宮本 2011；大原・他 2012；稲場 2013；黒崎・稲場 2013；嶺崎 2013］と「医療福祉」［沖永 2012；白波瀬 2012；岡光 2013；寺沢・横山 2014；加茂 2015；伍・寺沢 2015；櫻井 2015］、そして特定の活動領域ではなく複数の活動全般を扱う「全般」［稲場 2011；櫻井 2011；高尾 2011；寺沢 2012；矢野 2011；金子 2013］が多くを占めていることである。その次に多いのは「平和多文化」［山口 2011；濱田 2014；高橋 2014］、「ネットワーク」［冬月 2012；長澤 2012；濱田 2013；金谷 2013］、「教育文化」［葛西 2011；阿久津 2013］、「認識」［寺沢 2011；辻村 2012］および「途上国」［渡辺 2011］である。「地域」「環境」に該当するものは見られなかった。

対象地域をまとめたのが図 4 である。日本を扱った研究が圧倒的に多い。

国外については中国や台湾などの東アジア社会［川田 2012；辻村 2012；金子 2013；伍・寺沢 2015］、サウジアラビアやトルコなどのイスラム社会などが比較的多く取り上げられている［葛西 2011、2012；高尾 2011；阿久津 2013］。日本を中心とした東アジア社会とイスラム社会に関心が向いていることがわかる。

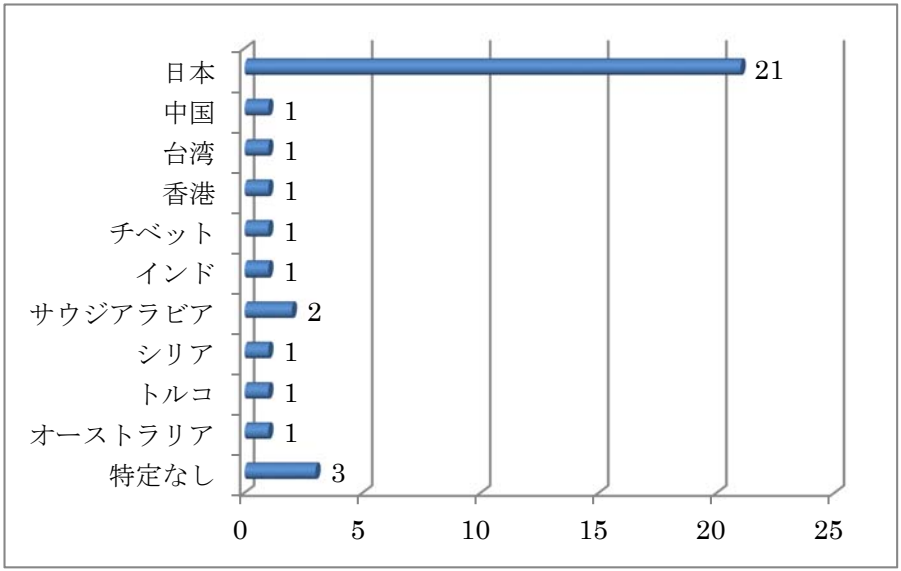

図 4　地域（理論研究と実証研究のみ　N=34）

それでは対象とするエリアはどうだろうか。ここでいうエリアとは、その社会の中の特定の地域を分析の主軸においた地域社会学的な研究なのか、社会全体を扱っていた場合でも、宗教よりもむしろその社会の解明に焦点が当てられているのか、といったことを意味する。分析結果をまとめたものが図 5 である。多くの研究が特定の地域を対象としているのではなく、その社会全般を扱っていることがわかる［濱田 2011、2012；葛西 2011；宮本 2011；高尾 2011；山口 2011；渡辺 2011；辻村 2012；沖永 2012；阿久津 2013；金子 2013；濱田 2014：高橋 2014；加茂 2015；伍・寺沢 2015］。これはそれらの研究が特定の地域を分析対象としているためではなく、その社会における宗教を主たる分析対象としているためである。地域を限定している分析としては、たとえば沖縄県や石巻市、中国青海省などが扱われている［金子 2011；冬月 2012；川田 2012；長澤 2012；白波瀬 2012；大原・

他 2012；金谷 2013；嶺崎 2013；岡光 2013；櫻井 2015］。全国を対象としたものはいずれも調査票調査や「宗教者災害救援マップ」などの量的調査・空間情報に基づくものである［稲場・黒崎 2011；寺沢 2011；黒崎・稲場 2013；寺沢・横山 2014；稲場 2015］。

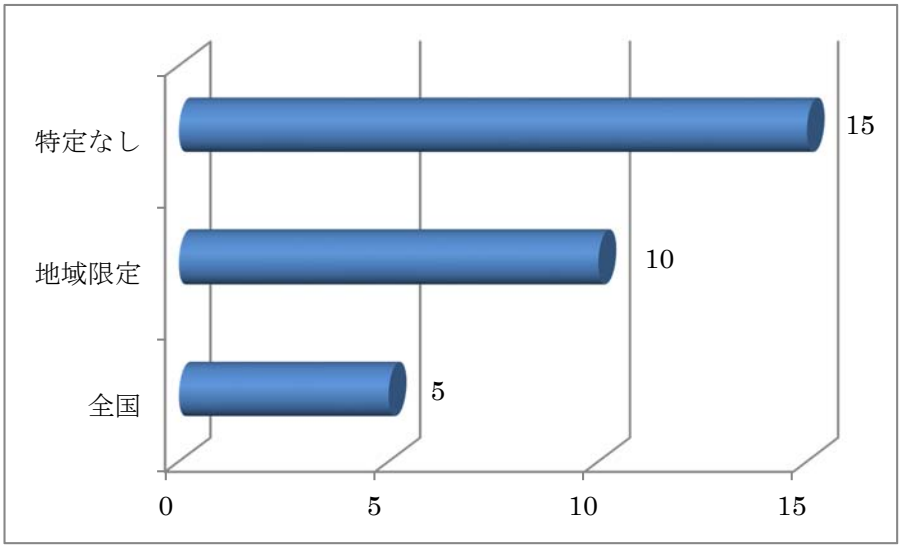

図 5　エリア（実証研究のみ　N=30）

最後にどのような宗教が分析対象とされているのかを確認する（図 6）。特定の宗教を対象とせず宗教全般を論じたものや複数の宗教を扱ったものが多くを占めている［稲場・黒崎 2011 宮本 2011；寺沢 2011；山口 2011；冬月 2012；沖永 2012；黒崎・稲場 2013；濱田 2014；寺沢・横山 2014；稲場 2015］。次に伝統仏教（日本の仏教各宗派やチベット仏教）［川田 2012；長澤 2012；大原・他 2012；辻村 2012］、新宗教（立正佼成会や一貫道、慈済会、オイスカ）［渡辺 2011；金子 2013；高橋 2014；伍・寺沢 2015］、イスラム教［葛西 2011、2012；高尾 2011；阿久津 2013；嶺崎 2013］、キリスト教［濱田 2011；白波瀬 2012；岡光 2013］、神道［金谷 2014］と続いている。

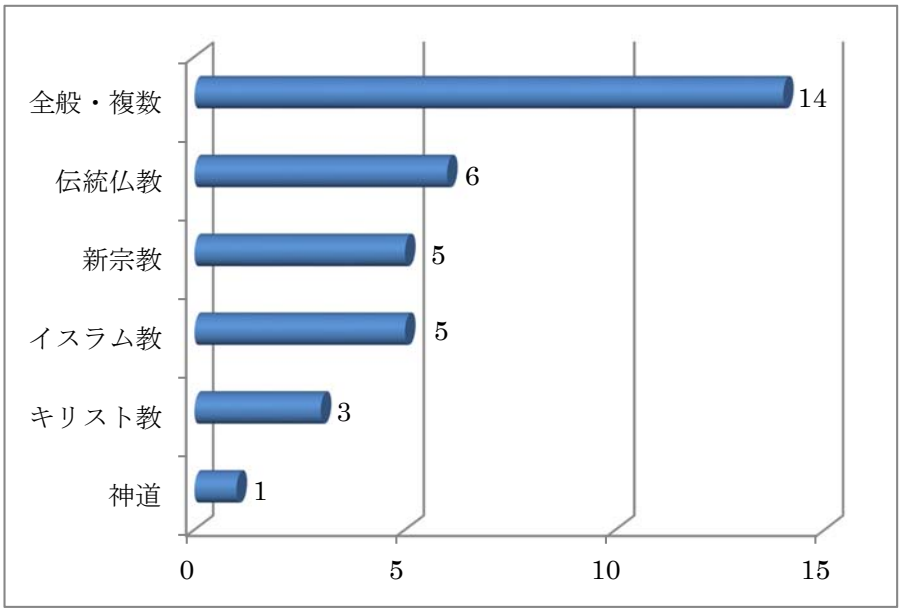

図 6　宗教（理論研究と実証研究のみ　N=34）

4. まとめと今後の課題

これまでの分析結果をまとめながら、今後、取り組んでいく必要があると思われる研究の方向性について、3 点、議論を行う。

第 1 に、研究対象とする活動領域についてである。前節の分析では、これまで震災支援を中心としたボランティアや NPO、支援活動、ならびに医療や健康、福祉、ウェルビーイングなどが主たる関心事として扱われてきていることが明らかになった。ボランティア領域と医療福祉領域が本研究会の主たる関心事であることがうかがわれる。

それでは研究会でまだ十分に取り上げられておらず、かつ今後取り上げる必要があると推察される領域に、どのようなものがあるだろうか。この点については近年の日本における宗教性と社会的態度の関連を論じた先行研究を参考にしてみたい。表 1 はこの分野における近年の主要研究である横井・川端［2014］および松谷［2004］で明らかにされた宗教性と社会的

態度の関係をまとめたものである。前者は「宗教的な心は大切である」という価値観に対する評価と結びつく社会的態度、後者は伝統宗教の有無について無宗教よりも家の宗教、家の宗教よりも信仰をもっていると回答する人が持つ傾向のある社会的態度である。カッコ内の「＋」は正の関連「－」は負の関連が見られたことを意味する。網掛けをしている部分は研究会で十分扱われていないものの今後、取り上げていく必要があると推察される領域である。

表 1　宗教性と社会的態度に関する主な先行知見のまとめ

「宗教的な心は大切である」 ［横井・川端 2014］	「無宗教＜家の宗教＜信者」 ［松谷 2004］
ボランティア・NPO・NGO（＋）	三世代同居観（＋）
低コスト利他行動（＋）	離婚観（離婚は良くない）（＋）
高コスト利他行動（＋）	結婚観（結婚すべき）（＋）
投票行動(＋)	権威への信頼（制度的信頼）(＋)
格差拡大肯定（－）	人は信用できる（＋）
社会的責任感（＋）	人間の本性（性善説）（＋）
結婚しても子供は必要ない（－）	政治的志向（保守的）（＋）
満足度：仕事の内容（＋）	
満足度：自分の収入（＋）	
ハイカルチャー（＋）	

まずボランティアや利他的行動は、先述したように研究会でも集中的に扱われている領域である。このほかにも幸福感［宍戸・佐々木 2011］も宗教性との有意な関連が指摘されており、研究会で扱ってきたウェルビーイングや医療福祉と関連するものである。一方、これらの研究で有意な関連が示されている一方で、研究会で扱われてこなかったものの 1 つに政治活動や社会問題への態度や関わりが挙げられる（投票行動、社会的責任感、

保守的な政治的志向など)。社会問題への関わりについては信仰熱心な人は死刑に反対する傾向にあることも指摘されている［山本 2009］。2 つ目の領域は家族や教育に関する領域である。たとえば宗教性の高さは、人は結婚をすべきである、結婚をしたら子供を持つ必要がある、三世代同居を望む、離婚は望ましくないという価値観との関連が指摘されている。3 つ目は階層や職業に関する領域である。宗教性の高さは仕事の内容への満足度の高さ、自分の収入への満足度の高さと結びついている。4 つ目はハイカルチャー志向といった文化やライフスタイルに関する領域である。これらの領域に関しては、研究会のこれまでの研究で十分に扱われてこなかったものである。

その意味で、今後はたとえば、政治行動や政治的態度、社会問題への関わり、子育てや高齢者の支援などの家族問題、職業や労働など階層・階級の問題、文化活動などのライフスタイルの問題に宗教がどのような関わりをしているのかを検討していくことに意味があると思われる。これらは様々な宗教団体においても重視され、またこれらの領域において宗教が表出しやすい領域であることが予測されるためである。

ただし、難しいのは、これらの領域への関わりが「社会貢献」と呼べるものかどうか、という点である。たとえば保守的な政治意識や家族観と宗教の結びつきについて、それが「社会貢献」と呼べるかどうかは、研究する側の価値観によって大きく異なると推察される。

宗教の社会問題への関わりについても、その社会問題の原因として何を推定しどのような解決策を提示するかまで含めると評価は難しくなる。たとえば、先の死刑廃止に関しても、日本の死刑廃止論者の多くが価値観やイデオロギーに基づく主張をするが故に、死刑存続論者を説得できるような現実的な死刑廃止論を展開できていないことを指摘する［山本 2009］。また、保田［2006］は「少年少女が殺人などの凶悪犯罪をおかす場合、加害少年少女の心理状態は、その原因としてどの程度関係していると思いますか」という心理還元主義を測定する設問について、信仰する宗教のある人は心理還元主義が有意に高い傾向にあることを指摘する。社会問題を価値観に基づいて論じることや心理的な問題として捉えることが「社会貢献」になるのかどうかは検討が必要である。その点で、研究会でも取り上げられてきた「社会貢献」に対する認識の研究も今後必要である。

第 2 に、先行知見の共有化が今後必要である。前節の分析では、ベーシ

ックな質的研究の蓄積が豊富であるとともに、様々な量的調査や空間情報の作成など幅広い手法を用いた研究が行われていることが明らかになった。量的研究について言えば、研究会報告でも、多面的宗教性とボランティアの関わり［三谷 2012］や宗教性と社会活動の間の地域要因の疑似相関の検証［寺沢 2014］、台湾の慈済会の所属者のエスニシティーと社会階層の変容［寺沢 2015］などについての報告が行われている。

その一方で、レビュー・動向研究はわずかである。この傾向は、研究会において先行知見の共有化が必ずしも十分に行われてこなかった可能性を示唆している。先述した、未開拓の領域を研究していく上でも、先行知見のレビュー作業が不可欠になるだろう。

第 3 に、宗教と社会貢献がどう社会構造に埋め込まれているのか、についての検討が今後の課題である。前節の分析では、研究会で扱われている地域と宗教の多様さが確認された。たとえば東アジア社会やイスラム社会を中心とする様々なアジア社会が取り上げられている。宗教についても幅広く扱われており、宗教間比較も行われている。対象とする地域の範囲についても全国調査もあれば地域限定の調査もあるなど、様々な実証研究が行われている。その一方で、宗教と社会貢献の関わり方の地域による差異を検討した論考はほとんど見られなかった。

たとえば、同じように僧侶が自殺予防の活動を行ったとしても、どの地域で行うのかによって、僧侶がとる活動方法やその効果は異なってくることが予想される。伝統的な地縁が色濃く残る地域で活動を行った場合と地縁自体がほとんど存在しない都市部では、同じように自殺予防活動を行ったとしても結果はことなる可能性がある。このような意味で、宗教と社会貢献の関係は、それがどのような社会構造に埋め込まれているのか、どのような社会状況で実践されているのかによって異なってくるだろう。

実際に、いくつかの先行研究においては、社会的属性によって関連パターンが異なることが指摘されている。たとえば宗教性とウェルビーイングの関連については、学歴の低い人々においては宗教性の高さはウェルビーイングの低さと関連するのに対して、学歴の高い人々においては宗教性の高さとウェルビーイングの高さが関連する［Schieman et al.2003:212］。また個人所得が高い人ほど、教会内グループの主導的役割に就く傾向にあるが、その傾向は経済的に貧しい教会でより顕著であることが指摘されている

［Schwadel 2002:571］。

以上の先行研究からは、宗教と社会貢献の関連パターンは、その背景にある社会構造の影響を受けていることが浮かび上がってくる。ここまでで取り上げた社会構造は地域、学歴、経済状況だが、その他にも、職業、性別、年齢、家族構成、エスニシティーなど取り上げるべき社会構造は多い。このような社会構造がどのように宗教と社会貢献の関係にバリエーションをもたらしているのか。今後の課題である。

【付記および謝辞】

本研究は日本学術振興会科学研究費に基づく以下の 3 つのプロジェクトの研究成果の一部である。「台湾における宗教性・社会階層・精神的健康に関する社会学的研究」（若手研究 B、研究代表者：寺沢重法、課題番号：15K20821）、「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の比較社会学的研究」（基盤研究 B、研究代表者：櫻井義秀、課題番号：25301037）、「人口減少社会日本における宗教とウェルビーイングの地域研究」（基盤研究 B、研究代表者：櫻井義秀、課題番号：15H03160）。

また、本稿は 2015 年第 1 回「宗教と社会貢献」研究会（2015 年 5 月 9 日、國學院大学渋谷キャンパス）における同一タイトルの口頭発表に基づくものである。また、原稿執筆に際しては寺沢梢氏（北海道大学大学院修了）のサポートをいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

（本稿の分析対象とした文献には、著者名の後に※を付している。）

阿久津正幸※2013「非イスラーム世界における hizmet ――ムスリム社会の構築とイスラームの伝統的価値観――」『宗教と社会貢献』3(1)：1-25。

冬月律※2012「宗教専門紙が報じる過疎問題――仏教系・神道系専門紙を手掛かりに――」『宗教と社会貢献』2(2)：69-85。

濱田陽※2011「賀川豊彦と海洋文明――死線と大震災を越えて――」『宗教と社会貢献』1(1)：53-77。

――――※2013「エッセー　あたたかい心の資本――ソーシャル・キャピタル創出の根源――」『宗教と社会貢献』3(1)：75-80。

――――※2014「環太平洋の平和的発展と共有宗教文化――オーストラリアの四つの事例――」『宗教と社会貢献』4(1)：27-60。

春山明哲 2009「日本台湾学会の 10 年を振り返って」『日本台湾学会報』11：5-10。
稲場圭信 2009「宗教的利他主義・社会貢献の可能性」稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』世界思想社：30-54。
————※2011「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」『宗教と社会貢献』1(1)：3-26。
————※2015「災害時における宗教施設とソーシャル・キャピタル――全国の自治体と宗教施設の災害協定調査から――」『宗教と社会貢献』5(1)：71-86。
稲場圭信・黒崎浩行※2011「東日本大震災における宗教者・宗教研究者の連携」『宗教と社会貢献』1(2)：99-105。
加茂順成※2015「信頼される宗教教団の社会貢献活動とは――浄土真宗本願寺派の傾聴活動『グチコレ』を事例として――」『宗教と社会貢献』5(1)：55-69。
金子昭※2011「東日本大震災における台湾・仏教慈済基金会の救援活動――釜石市での義援金配布の取材と意見交換から――」『宗教と社会貢献』1(2)：73-80。
————※2013「台湾・慈済大学における日台学術交流研究会報告 ――「人文臨床と無縁社会：人間的ケアはいかに可能か」――」『宗教と社会貢献』3(1)：53-64。
金谷信子※2013「日本の伝統宗教とソーシャル・キャピタル――神社活動を事例に――」『宗教と社会貢献』3(2)：1-25。
葛西賢太※2011「国際文化祭ジャナドリヤからみたサウジアラビア文化とイスラーム」『宗教と社会貢献』1(2)：81-91。
————※2012「自然災害と震災復興の経験をグローバルに共有する」『宗教と社会貢献』2(1)：61-67。
川田進※2012「中国政府の宗教政策と「公益」活動――チベット系仏学院の震災救援活動を通じて――」『宗教と社会貢献』2(2)：1-16。
黒崎浩行・稲場圭信※2013「宗教者災害救援マップの構築過程と今後の課題」『宗教と社会貢献』3(1)：65-74。
松谷満 2004「宗教意識の規定因としての宗教――「信者」層・「家の宗教」層・「無宗教」層の比較――」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』3：187-198。
嶺崎寛子※2013「東日本大震災支援にみる異文化交流・慈善・共生 ――イスラーム系 NGO ヒューマニティ・ファーストと被災者たち――」『宗教と社会貢献』3(1)：27-51。
三谷はるよ 2013「ボランティア参加と宗教的態度の関連の計量的検討」2012 年度「宗教と社会貢献」研究会第 1 回研究会（2012 年 7 月 14 日、國學院大學渋谷キャンパス、口頭発表）。
宮本要太郎※2011「東日本大震災からの復興を祈念して――「支縁のまちネットワーク」からの発信――」『宗教と社会貢献』1(2)：93-97。

長澤壮平※2012「山岳登拝のソーシャル・キャピタル――出羽三山の登拝行事を例に――」『宗教と社会貢献』2(1)：1-17。

伍嘉誠・寺沢重法※2015「香港における高齢者の主観的ウェルビーイングにおける宗教の役割――一貫道の高齢信徒へのインタビュー調査から――」『宗教と社会貢献』5(1)：1-27。

沖永隆子※2012「移植医療における弱者の「いのち」――子どもの脳死臓器移植問題に関する一考察――」『宗教と社会貢献』2(1)：19-43。

大原千心・竹内武昭・中尾睦宏・山岡和枝※2012「お寺の利便性とその活用のあり方――東日本震災後のお寺の宿泊提供活動を通じての事例――」『宗教と社会貢献』2(2)：87-97。

岡光信子※2013「南インドの伝統医療「ナーットゥ・マルンドゥ」と一修道会の地域貢献の試み」『宗教と社会貢献』3(2)：27-47。

櫻井義秀※2011「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』1(1)：27-51。

――――※2015「傾聴する仏教」『宗教と社会貢献』5(1)：29-53。

Schieman, Scott, Kim Nguyen and Diana Elliott 2003" Religiosity, Socioeconomic Status, and the Sense of Mastery." *Social Psychology Quarterly* 66(3):202-221.

Schwadel, Philip 2002 "Testing the Promise of the Churches: Income Inequality in the Opportunity to Learn Civic Skills in Christian Congregations." *Journal for the Scientific Study of Religion* 41(3):565-575.

白波瀬達也※2012「沖縄におけるキリスト教系 NPO によるホームレス支援――Faith-Related Organization の 4 象限モデルを用いた考察――」『宗教と社会貢献』2(2)：41-58。

宍戸邦章・佐々木尚之 2011「日本人の幸福感――階層的 APCAnalysis による JGSS 累積データ 2000-2010 の分析――」『社会学評論』62(3)：336-355。

高橋典史※2014「宗教組織によるインドシナ難民支援事業の展開――立正佼成会を事例に――」『宗教と社会貢献』4(1)：1-25。

高尾賢一郎※2011「ムスリム社会における社会貢献――現代シリアのアブー・ヌールの事例――」『宗教と社会貢献』1(2)：1-21。

寺沢重法※2011「宗教活動は社会貢献活動か？――「宗教団体の社会的な活動に関するアンケート調査」の分析――」『宗教と社会貢献』1(1)：79-101。

――――※2012「アメリカにおける『宗教と社会活動』研究の動向 ――*American Sociological Review*, *American Journal of Sociology*, *Journal for the Scientific Study of Religion*, *Review of Religious Research, Sociology of Religion* のレビューを通じて――」『宗教と社会貢献』2(1)：45-60。

――――2014「伝統宗教か？地域か？――JGSS-2010 による伝統宗教・地域・社会

活動参加の関連の分析――」2014 年度「宗教と社会貢献」研究会第 1 回研究会（2014 年 7 月 13 日、國學院大學渋谷キャンパス、口頭発表）。

――――2015「慈済会信徒のエスニシティーと社会階層は多様化しているのか？――TSCS-1999/2004/2009 の分析――」2014 年度「宗教と社会貢献」研究会第 2 回研究会（2015 年 1 月 12 日、関西学院大学梅田キャンパス、口頭発表）。

寺沢重法・横山忠範※2014「「死後の世界を信じること」と幸福感――JGSS-2008 の分析――」『宗教と社会貢献』4(2)：1-25。

辻村優英※2012「ダライ・ラマ 14 世における「宗教と社会貢献」――「宗教」概念と「利他主義」について――」『宗教と社会貢献』2(2)：17-40。

山口洋典※2011「多宗教の実践知が社会を救済する――「共生社会と宗教」を終えて――」『宗教と社会貢献』1(1)：103-109。

山本博子 2009「裁判員制度導入以前における日本の死刑制度の賛否に関する世論の分析――JGSS 累積データ 2000-2001 における死刑反対の根拠について――」『京都社会学年報』17：67-85。

矢野秀武※2011「「宗教の社会貢献」論から「宗教研究の社会的マネジメント」論へ」『宗教と社会貢献』1(2)：49-71。

保田直美 2006「JGSS-2005 にみる日本の心理主義――心理学知識と心理還元主義の擬似相関――」 『日本版 General Social Surveys 研究論文集』6：119-130。

横井桃子・川端亮 2014「宗教性の測定――国際比較研究を目指して――」『宗教と社会』19：79-95。

渡辺知花※2011「財団法人オイスカの「人を育てる」開発支援――ネオリベラリズムへの批判を超えた NGO による主体形成の考察――」『宗教と社会貢献』1(2)：23-48。